

恵に依り此安心を得給ひ、其他一切の者は皆聞て信じて此安心を得たのである。故に信心の決定せぬ者は安心は得られぬ。自分は常に安心とは信心決定あり信仰の決定は安心決定なり安心決定は成佛ありと確信して居る。六即の内て第六の究竟即と云ふも畢竟信仰が決つて動かぬやうになつたのが究竟即であるから、自己の信じた御本尊御題目の如くに自己の精神行動が少しも背かぬ様にあつて敵に向つても尙ほ慈悲を以て對するやうにあつたのが此究竟即である、敵に對して腹が立つ様では折角御本尊の通りに佛界菩薩界が上に出てゐながら又再び地獄界が上に現はれるやうでは究竟即の信心とは云へぬ。所謂宗祖の「相模守殿こそ善智識よ平左衛門こそ提婆達多よ(中略)日蓮が佛にならん第一のかたうどは景信、法師には良觀、道隆、道阿彌陀佛平左衛門尉守殿ましますんば争か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ」(縮遺一三九九一四〇)御振舞御書と云ふ風に、敵を善智識と思ひ怨に酬ゆるに恩を以てし身を死して社會人類を救

濟する迄でに信仰に依つて實行が導かるゝ様になつたのが眞實究竟即の信仰にして安心決定であり又成佛決定である。

近 詠 高三 森 亮 遠

ふるさとを わかこひをれば あはれにも
ふそねか はゝかまつむしのこゑ

化他よりは自行を先に

中三 堀内 泰 鑑

吾人が本化門下の一分子として世を救ひ人を導き行かんと欲せば未づ確固不動の信念の修養なかるべからず。而して如何に卓越せる舌頭三寸を動し最勝甚深の法を説くも實社會に無關係なるものなりせば所謂骨折り損の疲れ儲けとなるのみ。吾國古來よりの宗派、數、數十を數ふと雖も末法濁世の暗夜に赫々たる光明を放ち萬民をして悉く菩提の彼岸に行かしむべき方ある燈臺は果して幾何あ

りや。予は信ず。吾が日蓮大聖の色讀に依りて開明せられし佛陀五十年中の金口、無上醍醐味たる法華經より外にはなしと。無上寶珠と雖も有意義に活用せざれば草木國土悉皆成佛の大願も常寂光土の實現も覺束あし。禮記の中に『嘉肴ありと雖も食はざればその味を知らず至道なりと雖も學ばざればその道を知らず』とありて、山海の珍珠も口にせずして嫌ひ、無上道ありと雖も研めずして忌む者殊更多き世なり。されば無宗教者と稱して得々然と構へ居る者益々跋扈の狀態とあれり。これ等の愚者によりて謗法の叫は潮の如く起り剩へ他宗は厭世悲觀的我田引水の方便説を用ひて愚民を感しつゝある現時。本化門下は能所を論せず大なる確信を以て權門の徒に對せざるべからず。

其處に健全なる自信と、順理なる勇氣の必要を生じ來る。如何に自信あるも果斷の勇なくんば遲々、又自信なき勇氣は如何に潑刺たる動作に出づとも兩者は何れも完成の局を結ぶ事能はず。されば兩者は車の、兩輪鳥の双翼の如く一も缺くべからざるものなり。

然るに現代宗教家の通弊とも云ふべきは演壇上の言論のみ高尚優雅にして、實行の伴はざるのみか、反りて初信の者に惡感念を抱かしむる事さへあり、此處に於てか吾人は未づ身口意三業の中にては意志に『吾は佛の使あり』『一切衆生の父母なり』『日本國の柱なり』と仰せられし聖祖の御本懷を繼ぎて大決定心の下に精進すべき要を觀る。に於てかく平等の大慈悲心に決定せば自ら艱業に於て實行さるべし、如何に千言萬語をつくし百方に教令すとも言行一致せざる時は、滔々懸河の雄辯も無効に終り。純乎熱烈ある信念に住せば如何に訥辯なりと雖も衷心の叫を發露せよ、然らば期せずして感化の効あらはれん。以上身意の二業は皆自行なり。此の二行圓滿に成就し清淨なる身となりしかば但に化他の行に敏なるべし、斯如佛使とじて耻しからざる自信ある身となりしかば『縦ひ頸をば鋸にて引き切り胸をば菱矛を以てつゝき足にはほだしを打て錘を以てもむとも命の通はん程は南

無妙法蓮華經——』と云ふ勇氣も樂觀的信念も生じ來り苦海に没在せる衆生を憐愍する情勃々として起るあり。此處に於てか聖祖の奮闘史に私淑しつゝある吾人は言論と實任てふ感念に住し未づ自己修養の範を示し、而して後化他に及ぶべし。世間に云ふ實踐躬行出世間の色心二法の修行、此の域に達して初めて人天の大導師たる資格をも得らるべきなり。然り吾人佛子よ、勉め勵めよ、化他よりも身行を先に。

法華經行者の折伏と迫害

中二 鈴木順曉

諸經中王最爲第一の法華經弘通の爲には、あらゆる迫害を被るべきことは佛識として、教主釋尊法華經說法の會座に於て明かあり。乃ち方便品の『此の經を讀誦し受持する者を見て經賤憎嫉して結恨を懷かむ』法師品の『此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや』殊に勸持品不

輕品の如きは全文字殆んど法華行者に對する迫害の覺悟を垂示せるものに非るはをし、其の世運の衰頹、末法比丘の心、邪智、諂曲なるを述べ、末法の行者たる者三類の強敵に反抗し、不惜身命の決心を以て、惡口罵言刀杖瓦石等諸の苦難を忍ばざるべからざるを説くの文意尤も激越を極む。

宜かる哉、此の如來誠言の實現せられたるは今を去る六百有年前、消長明滅の世に出現して天下高僧碩學の淵藪とも云ふ可き、鎌倉に法陳を張り熾んに法華折伏破權門理を獅子吼せられたる、宗祖の御一代、四個の格言を擧げ諸宗無得道を絶叫す、諸宗の僧俗は怨嗟措く處を知らず、法を路傍に説けば杖木瓦礫を投ずるあり、經を壇上に講ずれば狂と呼び、痴と嘲けるあり、公難私難四個の大難無量の小難は其の身邊に集來せり、然れ共上人は益々而強毒之の法鼓を打鳴らし、折伏の決心愈々固く、逆化の氣焰を昂むるのみありき。兩來本宗行者の妙法教化宣傳の爲、謗法の上に大法兩を雨らし反對者の讒作怨嫉は競ひ起るも不屈不撓